

論文の要旨

論文題目 羽仁吉一に見る「家庭」思想の創成
日本近代精神史の一軌跡として

氏名 栗原葉子

学位 博士（文学）

授与年月日 平成 16 年 2 月 27 日

本論は羽仁吉一という実在の人物を媒体として、明治 30 年代から明治末期を中心とした「家庭」像創出の過程を検討したものである。日本近代精神の一つの思索の道を明らかにしようとした視座の基底にあるのは、近代百年は果たして人々を本当に幸福にしたのか、本当の豊かさとは何かという疑問である。

羽仁吉一は妻もと子と協業で、今に続く『婦人之友』（『家庭之友』を改題）を出版し、また自由学園の教育事業を通して「家庭」思想の創出と普及に一生を捧げた人物である。だが、従来、それらはもっぱら妻もと子の業績としてのみ研究の対象とされ、吉一は社会的にはほとんど無名のままであった。第 1 章は、こうした知られざる人物吉一像の概略と研究史を紹介している。

近代日本人の精神性を歪曲させた最大の要因として、明治的「家」についての研究には歴大な蓄積がある。これに比して「家庭」研究は手薄で、とりわけ明治 20 年代の家庭雑誌分析と大正期の実態としての家庭研究との間隙にある、明治 30 年代から末期にかけての時期は開拓不十分な領域として取り残されてきた。第 2 章では「家庭」を主題とする本論の前提として、「家」と「家庭」の研究史を概略し、また、本論の対象時期について先学の研究を軸に思想的視座から整理している。

現代日本人のありようが決定的に形成されたのは明治維新以後の近代化過程、なかでも近代国家としての体制の枠組みが整い、その中身の理念作りに向かった明治 30 年代、即ち 20 世紀以降である。列強に対する遅れの意識をエネルギーにして、明治の幕開けから近代国家づくりを急速度でおし進めてきた日本は、日清戦争に勝利して以後、日露戦争と第一次大戦を経て第二次大戦に連なる軍事大国化の道を進む。その結末が敗戦であった。そして敗戦後の 20 世紀後半期は経済大国化へとひた走り、その結末がバブル破綻であったことは、まだ記憶にも新しい。実に 20 世紀の百年間に日本は軍事大国と経済大国の二つを達成し、二つを崩壊させたのである。

このような重大な世紀の変わり目となる明治 30 年頃に上京した青年が吉一である。伊藤博文、山県有朋、乃木希典ら、明治近代化の骨組みを構築し、また軍事国家へと誘導した国家体制作りの人脈を圧倒的に輩出した長州(山口県)出身であった。しかし、吉一は同郷の志士たちのように、政治家にならず、軍人にもならなかった。彼が生涯をかけたのは殖産興業と富国強兵を標榜した

大きな家 = 「国家」つくりでなく、「家庭」という小さな家つくりであった。否、もっと正確に言えば、『家庭つくり』という思想つくり』に生涯をかけたのである。

吉一が結婚し家庭向け雑誌を創刊した日露戦争前後は、産業社会面でも大きな変革期であった。産業の発展に伴い農村から流入してくる人々が都市人口は飛躍的に増大し、工場で働く労働者階層が社会的に形成されると共に、役人や教師や会社員など大都会を中心に頭脳労働を特色とする俸給生活者の、いわゆる新中間層が登場する。明治 20 年代に言説として語られてきた「家庭」を実態化する新中間層が、30 年代後半には社会階層として台頭しはじめたのである。こうした家族の変容は、とりわけ女性の役割に大きな変化をもたらした。地縁共同体からも血縁共同体からも切り離された核家族の中で、女たちは従来までの伝統的な経験知に代わって、新しい家族にふさわしい新知識を強く求めるようになったからである。

この当時「家庭」という用語には、従来の家父長的な「家」生活の改善・改良を軸とする新しい生活設計の希求が込められた。「家庭」とは戸棚の整理や家計簿など狭い生活内の些事を指し示すのではなく、社会的な新しい思想を担った注目に値する新概念であったのである。この頃急速に普及浸透した女子教育は、女性の意識を高めて女性に自己と社会や男性との関係を相対化してみる視点を与えたが、それはこれまで女性の宿命として諦めてきた「家」制度の重石を、耐え難いものとして意識させることにもなった。明治の多くの女性にとって、社会とは「国家」であるより先に、まずは「家」制度下の父や夫として立ち現れた。それだけに新「家庭」には強い願いと意志が込められたのである。

こうした動きの一方、明治 30 年代は前代の封建的「イエ」実体の解体と反比例するようにして再編・強化された明治的「家」の枠組みが、法律と道徳にまたがって人々に強い規範力をふるうようになり、家庭という「小さな家」の問題は、国家の問題より劣位の、私的な、女の領域の問題として矮小化されていった時期でもあった。社会のあらゆる局面で、明治維新以来整備されてきた「近代」の枠組みが実質的に胎動し始めたと同時に、それを抑えこむ圧力も次第に強化されていったのである。

こうした状況下ゆえに一層、吉一がなぜ、どのように家庭思想に向かうことになるのか疑問となる。明治 13 年長州生まれの男性吉一が国家ではなく、「家庭」という小さな家のありようを問うということ自体が、すでに革命的な問いかけを含んでいるのである。第 3 章では吉一の自我形成期における家庭思想の基本的土壌について、また第 4 章では上京後の思想の醸成に多大な影響を与えた人々や場について、教育、文学、建築、報道、政治など多面的に当時の社会状況と吉一の個人的体験とを重ね合わせて考察する。天下国家でなく「家庭」を、男性でなく「女性」を対象とする、新聞マス・メディアから「リトル・マガジン」へと基軸を収斂させ、家庭思想の実践を使命として生涯貫くことになる吉一の前半生を追っている。

第 5 章は前章までの理解を踏まえた上での実証編である。『家庭之友』『婦人之友』の吉一・もと子の記事分析と、『六合雑誌』『青年之友』掲載記事から、吉一が示した「家庭」思想の特色と、その思想史的意義について具体的に検討している。これらを通じて、もっぱらもと子の思想として知られてきた「家庭」思想は、必ずしももと子主導であったとは言えないことが明らかに

なる。明治 30 年代に台頭しはじめた新中間層に照準を定め理想的家庭生活の向上を説いた吉一の家庭論は、少なくとも言説で見ると、もと子が『婦人之友』に自身の思いを発言するより先である。むしろ、もと子の家庭論の出発の土台となり、あるいは常にサウンディング・ボードとして機能したと言えよう。

吉一の家庭思想に通底しているのは、個々人の主体的な意識と実践を尊重する市民主義的な精神である。名も持たぬが、まぎれもなく歴史の主体的担い手の一人である「私」の当事者性と個人性の認識である。吉一にとって家庭は小さな閉鎖的世界に止まるのではなく、また単に休息や娯楽の場なのではなく、社会改良の展望が課題として含まれていた。理想の「家庭」作りは決して人間の些事ではなく、男女が共に真摯に取り組むべき社会的な事業として重視された。女性が家庭人であること自体に社会的な意味を付与し、女性への敬意を高めた。当時の社会主義運動が主に女性の社会的政治的権利の獲得を目指したのに対して、あくまで生活レベルにこだわった。家庭運営に倫理性を付与し、人間の生の基本としての生活を主体的に向上させていくエネルギーを家庭の主婦層に呼び覚まし、それをひとつの社会的運動体にまでひきあげていった。しかも、単に理念の上のみならず、現実の家庭生活でも、妻もと子の思いを生かし、その具現化を背後から支え続ける実践家として貫いた。思想の価値は、それが思想史上でどれほど画期的意義を持ったかという点も重要には違いないが、どれほど多くの人々の胸に思いを届け、現実生活の改革にまで至らしめたかという点も劣らず重要である。しかもその思想の質の重要性は、今時からみた評価でなく、その時代の歴史の中に深く戻して考察されねばならない。吉一の家庭の思想は、ひとことでいえば「良識」である。男女が相寄り日常生活を高めるのに、当時の女性にとってそれは、あるいは華々しく登場した『青鞥』以上の影響力を持ったと思われる。吉一は際だった理論家ではなかった。だが、理性的で平明でさりげない文章の内容は、実際には覚醒させるような近代的、合理主義、個人主義的な発言であった。女の雑誌は女が主役であるべきだとして、妻もと子を前面に立たせ、自身は背景の人として徹した在り方もまた、瞠目に値する行為であったと言すべきであろう。

吉一の生涯と思想の軌跡は、思想と日常の暮らしを切断したまま怪しまない通念を問い直し、男と女が営む生活という局面の歴大な未開拓の堆積分野が歴史認識に対して持つだろう意味を我々に問いかけている。結語に当たる終章は、20 世紀初頭という時代と羽仁吉一についての総括、及び本論の視座が持つ意義と展望についてのまとめである。家父長社会を変え、男も女も双方が「生命」の生産にも「モノ」の生産にも参与し、自由意志で人生を構築する権利と責任をもつようになること。男女双方が持てる力を存分に生かし、共に幸福であること。そのような社会への第一歩は足元の「家庭」から始まる。自らの身をもってさし示した吉一の生涯であった。その生涯は、同郷の志士たちと現れ方は大きく異なるが、社会改革を目指すひとつの「青雲の志」だったと言えよう。